様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　５ 月 ２９ 日現在

機関番号：１０１０１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｈ０４３７８

研究課題名（和文）観光資源としての文化的景観の保全と活用に関する研究

研究課題名（英文）Study on Conservation and Utilization of Cultural Landscape as Tourism Resource

研究代表者
西山　徳明（NISHIYAMA, NORIAKI）

北海道大学・観光学高等研究センター・教授

研究者番号：６０２４３９７９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　13,100,000円

研究成果の概要（和文）：具体の文化的景観地域を対象とし、景観を観光資源として活用するために必要となる価値の把握と解説の枠組を、広大な景観地である平取町とペルーのチャチャポヤにおいては先住民のコスモロジーの視点、阿蘇では「農地・居住地・森林・草地の土地利用ユニット」を景観単位とした視点から新たに開発した。そしてそれらを地域社会が観光目的地として保存活用するCBTモデルを用い、価値づけた資源の活用効果を分析した。具体的にはエコミュージアムによる保存活用モデルを、萩市、竹富島、サルト市（ヨルダン）の事例研究から構築し、平取町とチャチャポヤに適用、広域の文化的景観地域における有効性と課題を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
研究成果の学術的意義は、新たな文化的景観の価値把握の枠組みを、これまで当該分野を支えてきた地理学、歴史学、建築学、造園学などの枠を越え、都市計画、観光学等の応用分野の観点を加えた包括的なアプローチから構築した点にある。また社会的意義としては、研究成果をわが国の文化政策および観光政策を世界的水準で位置づけることができる点であり、JICAと連携して実施した本研究は、途上国における観光開発国際協力事業の現場で今後さらなる発展が期待される観光を主体としたわが国の国際協力のあり方を展開させる可能性を持ち、観光目的地（tourism destination）形成施策の指針となる意義は極めて大きい。

研究成果の概要（英文）：This research focuses on specific cultural landscape areas, and establishes a framework for identifying and interpretating the value necessary for utilizing landscapes as tourism resources in Biratori Town and Chachapoya in Peru, which are vast landscapes. It was newly developed from the perspective of indigenous people's cosmology, and from the perspective of landscape units of "farmland, residential area, forest, and grassland land use units" in Aso. Then, using a CBT(community based tourism) model in which the local community preserves and utilizes them as a tourism destination, we analyzed the utilization effect of the valued resources. Concretely, a conservation and utilization model for Ecomuseum was constructed from case studies of Hagi City, Taketomi Island, and As-Salt City (Jordan), applied to Biratori Town and Chachapoya, and clarified the effectiveness and challenges in a wide-area cultural landscape area.

研究分野：都市計画学

キーワード：文化的景観　community based tourism　エコミュージアム　観光開発国際協力　デスティネーション・マネジメント　文化財保存活用地域計画

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

研究代表者は、これまで継続して文化遺産とツーリズムに関する研究に取組み、コミュニティ主体で自律的に振興されていく観光と文化遺産管理を理想とする CBT の考えを提案してきた【文献 1,2】。とくに集落・町並み、港市などの様々な文化遺産を対象に研究してきたなかで、日本では 21 世紀に入ってから注目されるようになったのが「文化的景観」である。わが国では「地域における人々の生活又は生業及び当該地域の風土により形成された景観地（略）」（文化財保護法第二条第１項第五号）と定義されている。しかし、本法に基づく保護対象にすべく、文化的景観を地域の生業との関係に絞って評価してきたため、見出されるべき多様な景観がその特性に即して適切に価値づけられていない。加えて、ユネスコ世界遺産条約における「文化的景観」も、現状のシステムでは結果的に多くのものが対象から漏れ落ちてくることが指摘されている【文献 3】。これらは、価値を見出し保全対象とすべき景観を矮少化させるという文化的景観保護制度に問われている根本的課題と言える。代表例で言えば、日本の制度下では、富士山や阿蘇の単一の構成原理からなる壮大な景域を文化的景観として評価することが難しい。そこで研究代表者は、観光資源として活用する視点から、文化的景観を「人々が永年にわたり自然に働きかけて形成されてきた景観」と幅広に定義し、同時にリビングヘリテージ（生きている遺産）として捉えることを試みた業績(3,5)。

観光学においては、スミスによるホスト＆ゲスト論の立場から地域文化にアプローチする方法が主流となってきたが【文献 3】、リビングヘリテージとしての文化的景観を捉えるには、ホストの関与によって造出される景観が、どのように価値づけされ、ホスト自身の手でどのように保全・活用されていくかという過程に焦点を絞る必要がある。

そこで、コミュニティが主体となって資源を管理し観光を展開する CBT に注目し、国際協力機構（JICA）と共同で CBT 開発による協力事業を実践してきた業績(1～9)。多くの JICA の国際技術協力プロジェクトや国内事例研究を通して明らかになったのは、現在の文化財保護制度を超えた文化的景観の価値把握を可能にする新たな枠組みの必要性であり、他の資源に乏しい地域における観光産業の重要性、CBT によるより効果的な地域創生の可能性である。

【文献 1】 西山徳明編『文化遺産マネジメントとツーリズムの現状と課題』国立民族学博物館研究報告 51 号、2004 年

【文献 2】 西山徳明編『文化遺産マネジメントとツーリズムの持続可能な関係構築に関する研究』国立民族学博物館研究報告 61 号、2006 年

【文献 3】 Mitchell,Nora., Mechtild Rossler & Pierre-Marie Tricaud (eds.) World Heritage Cultural Landscapes: A Handbook for Conservation and Management, UNESCO, 2009

【文献 4】 Smith, Valene. Hosts and Guests – The Anthropology of Tourism, University of Pennsylvania Press, 1989（スミス編、三村浩史監訳、西山徳明ほか訳『観光・リゾート開発の人類学－ホスト＆ゲスト論でみる地域文化の対応』勁草書房、1991 年）

２．研究の目的

本研究では、国内外の特徴的な文化的景観を有する複数地域においてその保全状況と観光利用に関する現地調査を実施し、その価値を客観的に把握する新たな枠組みを開発すること、および CBT を通じた価値の啓発と資源活用の効果を分析し、そのマネジメント・モデルの構築に向

けた課題を明らかにすることを目的とした。

なお、本研究の特筆すべき点として以下がある。わが国による国際協力事業を主体的に進める国際協力機構（JICA）による事業においては、これまで観光分野における国際協力の必要性を重視しつつも、分野的な新しさから、観光を主体とした国際協力事業の展開には消極的であった。その状況のなかでも、代表者が所属する北海道大学観光学高等研究センターは、JICA と連携し、世界各国（ヨルダン、エチオピア、ジンバブエ、フィジー、イラン、ペルー）における観光開発国際協力事業を実施してきた。本研究による学術的成果は、そのような現場での実務経験とあわせて、今後さらなる発展が期待される観光を主体としたわが国の国際協力のあり方を展開させるためのものであり、観光目的地（tourism destination）形成施策の基礎資料となることが予想されその意義は極めて大きい。

３．研究の方法

本研究では、国内外事例を対象とし、文化的景観を価値づける枠組みの再検討と、CBT を用いたコミュニティを中心とした観光のあり方を探るため、次の 3 本柱で研究を進めた。

(1)観光資源化しうる文化的景観の価値把握の枠組みの構築

ユネスコの世界遺産条約と日本の文化財保護法における文化的景観の価値づけと保護に対する概念とその歴史的変遷を文献資料から比較整理した。そして具体事例として、既に世界遺産リストに登録されている白川郷（岐阜）、レブカ（フィジー）、日本の制度下で保護されている阿蘇（熊本県）、平取（北海道）における現地調査をおこなった。さらに新たな文化的景観概念を創造しうる例としてチャチャポヤ（ペルー）、竹富島（沖縄県）、中標津町（北海道）に関する調査をおこない、従来の文化的景観概念適用の困難な点や保護制度の不十分な点などを整理することを通して新たな文化的景観の価値把握の枠組みを構築した。

(2)CBT による文化的景観マネジメントがコミュニティにもたらす効果の分析

既に本研究チームがコミュニティと長期間の信頼関係を築いているレブカ、チャチャポヤ、白川郷、竹富島、阿蘇を対象として、インタビューを含めた現地調査を実施し、ホストとしての地域社会が景観を保全・活用していく過程において、CBT がコミュニティにもたらす効果を分析・評価した。

(3)文化的景観を保全し解説する CBT のあり方の解明

上記 2 点の分析から、レブカ、白川郷、阿蘇、竹富島における CBT の展開の可能性を探る。既に世界遺産登録されているレブカ、白川郷における事例を、将来的にその可能性をもつチャチャポヤ、阿蘇、竹富島と比較することで、世界遺産条約や文化財保護法の枠組みを超えた文化的景観マネジメントのモデルについて考察した。

４．研究成果

本研究の成果として得られた結論および具体的な応用事例について以下に述べる。

(1)具体の文化的景観地域を対象とし、景観を観光資源として活用するために必要となる価値の把握と解説の枠組を開発した。

①広大な地形景観を基盤とする景観地である平取町においては先住民アイヌのコスモロジーが見出した景観要素から現代のアイヌ文化復興の要素に至る過程をレイヤー構造で説明しイウォロを景観単位とする価値説明の枠組みを開発した（下図参照）。

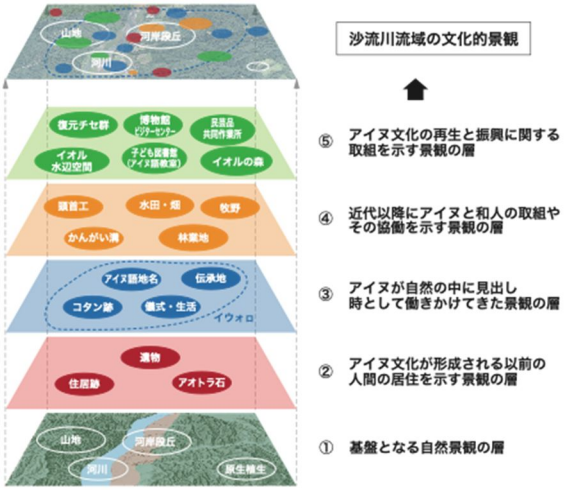

図　多文化の重層として理解する「沙流川流域の文化的景観」解説図

②同様に広大な地形景観を基盤とする景観地であるペルーのチャチャポヤにおいては古代文化チャチャポヤのコスモロジーがインカ期、スペイン占領期、共和制期を通じて変容しつつ継承される価値説明の枠組みを開発し、ペルー政府（文化省）の「チャチャポヤ文化的景観エコミュージアム計画」（後述）に採用された。

【内容】

(a) チャチャポヤのコスモロジー（信仰・自然観）を示す景観

(b) チャチャポヤ期から 1500 年間の持続的居住を示す景観

ｉ）チャチャポヤ期の居住とその後の断絶を示す景観

ii）チャチャポヤ期とその後の居住との連続性を示す景観

iii）チャチャポヤ期後の居住と信仰を示す景観

(c) チャチャポヤ時代からのアンデス型農業の有機的な進化を示す景観

(d) 生活のなかで現在まで生き続けているチャチャポヤ文化由来の無形遺産（祭、手工芸技術、神話、口承の伝統、住宅建設技術など）

③カルデラの単一景域を特徴とする阿蘇では「農地・居住地・森林・草地の土地利用ユニット」を景観単位とした新たな視点から景観構造を説明し地域社会の人々の暮らしと大景観のつながりをストーリーとして説明できる枠組みを開発した。

(2)それらを地域社会が観光目的地として保存活用する CBT モデルを用い、価値づけた資源の活用手法について分析した。具体的にはエコミュージアムによる保存活用モデルを、萩市、竹富島、サルト市（ヨルダン）の事例研究から「7 段階支援モデル」として構築し、平取町とチャチャポヤに適用、広域の文化的景観地域における有効性と課題を明らかにした。

(3)視覚による価値理解が求められる文化的景観の特性を考慮し、本研究で得られた知見や成果をわかりやすく発信する手法として、「文化的景観の価値把握の枠組み」「把握した価値をインタープリテーションする手法としてのエコミュージアム」「価値をマネジメントする手法」を具体事例においてビデオ映像（動画）化しアーカイブスとした（2021 年度制作）。下記映像を、各事例地域の関係者や住民などに共有し、フィードバックを得て再編集した。今後は研究室の HP で公開するとともに、研究会や地域でのワークショップ、国際協力の研修等で使用し、文化的景観の価値理解やそのマネジメントに有効なエコミュージアムの取組みの啓発を継続的に行う予定である。

① 「白川郷の文化的景観とマネジメント」（41 分 23 秒）
暫定掲載サイト：https://www.youtube.com/watch?v=vk3yoIkXags
② 「阿蘇の文化的景観とマネジメント」（38 分 27 秒）
暫定掲載サイト：https://www.youtube.com/watch?v=-E8n_QNtqWY
③ 「竹富島の文化的景観とエコミュージアム」（1 時間 34 分 4 秒）
暫定掲載サイト：https://www.youtube.com/watch?v=XZApgs_-SPw
④ 「萩の文化的景観とエコミュージアム」（1 時間 23 分 5 秒）
暫定掲載サイト：https://www.youtube.com/watch?v=Rpwu_J0jlxg

(4)上記成果群を、ペルーにおける実際の JICA 国際協力『ペルー国ウトゥクバンバ渓谷上流域における文化的景観の持続的な開発促進プロジェクト』の現場でペルー文化省文化的景観課、文化省アマソナス支局、アマソナス州観光局等に技術移転した。技術移転の内容は、ペルー文化省内のホームページ（下記）に現在も掲載されている。

ペルー文化省：https://aulavirtual.cultura.pe/course/view.php?id=123

(5)上記成果群が自治体や途上国政府の文化的景観のマネジメント計画等に社会実装された。

①平取町では、「令和４年度平取町文化的景観保護推進事業における文化的景観保存活用計画策定業務企画提案書」作成事業と協働し、本研究の成果である「先住民のコスモロジーの視点」による価値把握の枠組を導入することで、イウォロを景観単位とする重要文化的景観エリアの設定および景観構成要素の抽出等のあらたなマネジメント手法を社会実装した。

②阿蘇郡市では、世界遺産登録に向けた『世界遺産暫定一覧表追加資産に係る提案書　資産名称:「阿蘇カルデラ-草地とともに生きてきたカルデラ農業景観」』（2022）の「顕著な普遍的価値（OUV）」の説明に本研究成果である「農地・居住地・森林・草地の土地利用ユニット」を景観単位とする枠組が用いられた。また、重要文化的景観追加選定において、本研究成果である阿蘇カルデラ内の一体的な文化的景観保存エリアとしての選定の必要性が、ICOMOS の海外専門家からも支持され、計画に導入（社会実装）された。

③竹富島については、『竹富島の集落と民家［第二版］竹富町竹富島伝統的建造物群保存対策調査報告書竹富町』（2020）に本研究成果の文化的景観として価値把握と、観光利用に関する DM の課題を書き込み、『竹富島 歴史的景観形成地区保存計画書』『竹富島 景観形成マニュアル』の具体的な計画に実装された。

④チャチャポヤ（ペルー）では、「世界遺産暫定一覧表追加資産に係る提案書（随時更新）」の改訂時に、本研究の成果に基づく提案により、「中心遺跡単体登録」の方針から「チャチャポヤ文化のコスモロジーを示す７つの関連遺産群のシリアル登録」に変更された。また、本研究に基づく文化的景観のマネジメント計画「チャチャポヤ文化的景観エコミュージアム計画」が現在承認プロセスにある。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 福本 雅美 ，江面 嗣人 ，西山 徳明 ，八百板 季穂 ，大森 洋子 ，成田 聖	４．巻 772
２．論文標題 レブカの歴史的建造物の特徴と発展に関する研究 その１：戸建住居の平面構成について	５．発行年 2020年
３．雑誌名 日本建築学会計画系論文集	６．最初と最後の頁 pp.1367-1376
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 福本雅美，江面嗣人，西山徳明，八百板季穂	４．巻 31
２．論文標題 The changing fabric and use of Levuka’s historic residences and shop houses	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Historic Environment, Vol 31 2019, heritage conservation across the Pacifie, CULTURE: Conserving it Together, Australia ICOMOS	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 西山徳明	４．巻 2019年10月号
２．論文標題 リビングヘリテージとしての文化的景観の観光活用	５．発行年 2019年
３．雑誌名 文化庁『月刊文化財』2019年10月号「特集 「地域に生きる風土に根ざした暮らしの景観―文化的景観制度創設15年」	６．最初と最後の頁 pp.16-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　7件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 西山徳明
２．発表標題 南米ペルー チャチャポヤスにおける文化的景観の持続的保護
３．学会等名 文化遺産国際協力コンソーシアム「第13回中南米分科会」東京文化財研究所（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 西山徳明
２．発表標題 アフリカにおけるヘリテイジ・ツーリズムの現状と課題
３．学会等名 文化遺産国際協力コンソーシアム 「第12回アフリカ分科会」東京品川（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 西山徳明
２．発表標題 基調講演 富山湾から考える観光資源としての日本の海浜
３．学会等名 日本海学推進機構、日本海学シンポジウム「美しい富山湾を考えるー景観と暮らし」（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 西山徳明
２．発表標題 文化財保存活用地域計画における 構想と措置の重要性
３．学会等名 文化庁「令和元年度 文化財保存活用地域計画等連絡協議会」（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 西山徳明
２．発表標題 博物館の力でつなぐ文化資源と地域社会萩とヨルダンにおけるエコミュージアム支援
３．学会等名 ICOM（国際博物館会議）国際博物館の日記念2022シンポジウム「博物館の力 ： わたしたちを取り巻く世界を変革するもの」於 東京国立博物館大講堂（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 西山徳明
２．発表標題 阿蘇の文化的景観〜カルデラ火山が育んだ農業牧畜システム
３．学会等名 阿蘇世界文化遺産登録推進国際シンポジウム（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 西山徳明
２．発表標題 伝統的建造物群の保存における建築史学と都市計画学の協働
３．学会等名 日本建築史学会2023 年度大会記念行事 シンポジウム「その後の伝建地区」（招待講演）
４．発表年 2023年

〔図書〕　計6件

１．著者名 西山徳明、八百板季穂、麻生美希、上田裕文、四戸秀和、江面嗣人	４．発行年 2020年
２．出版社 竹富町教育委員会	５．総ページ数 280
３．書名 竹富島の集落と民家［第二版］　竹富町竹富島歴史的景観形成地区保存計画第二次見直し調査報告書	

１．著者名 西山徳明、成田聖、八百板季穂、四戸秀和	４．発行年 2019年
２．出版社 下郷町教育委員会	５．総ページ数 200
３．書名 大内宿の民家と集落 下郷町大内宿伝統的建造物群保存対策調査報告書	

１．著者名 西山 徳明・八百板季穂・他8名	４．発行年 2022年
２．出版社 独立行政法人国際協力機構（JICA）	５．総ページ数 80
３．書名 ペルー国ウトゥクバンバ渓谷上流域における文化的景観の持続的な開発促進プロジェクト プロジェクト業務完了報告書（フェーズ1）	

１．著者名 西山徳明・麻生美希・他5名	４．発行年 2022年
２．出版社 北海道大学観光学高等研究センター	５．総ページ数 118
３．書名 21 世紀・アイヌ文化伝承の森整備推進事業の内 アイヌ文化振興にむけた観光学等の学術的・多角的観点からの調査研究　北海道平取町＜21 世紀・アイヌ文化伝承の森＞に即してII（2021）報告書	

１．著者名 西山 徳明・他	４．発行年 2022年
２．出版社 熊本県・阿蘇市・南小国町・小国町・産山村・高森町・南阿蘇村・西原村	５．総ページ数 75
３．書名 世界遺産暫定一覧表追加資産に係る提案書　資産名称:「阿蘇カルデラ-草地とともに生きてきたカルデラ農業景観」	

１．著者名 西山徳明・四戸秀和・株式会社ノーザンクロス	４．発行年 2023年
２．出版社 北海道平取町	５．総ページ数 250
３．書名 令和４年度　平取町文化的景観保存活用計画策定業務　報告書	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	麻生　美希 (ASO MIKI) (00649733)	同志社女子大学・生活科学部・准教授 (34311)	
研究分担者	八百板　季穂 (YAOITA KIHO) (30609128)	岡山理科大学・工学部・准教授 (35302)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
ペルー	ペルー文化省文化遺産局文化的景観課			
フィリピン	マプア大学建築学科			